詩3ッ

露古

やさしい子

踝に花が咲いた
薄桃色のやさしい子
水をやるときゅるきゅる笑う

なまえは付けないの
なまえを付けると
この子はきっと
死んでしまうから

裏切りの朝

風は止んだ
私は左右の目を交互にしばたかせ
笑む
黒い踵が熱せられたままぱんぱんに膨れ上がっている
そう言えばあいつの踵は随分痩せていた
夏草の陰で足の指をぐんと反らせ
そら今そこを小さい神さまが通ったと言って私をからかった
あいつの踵は青く尖っていてとても醜かった

風は止んだ
裏切りのホルンを高らかに鳴り響かせ
今朝、私は岸に立つ

おしゃべり

おしゃべりなカケスはまだ誰も許さないでいる
一等賢そうなやつの肩先で今日も歌う